

Covid-19の漢方治療

治法にせまる
—伏在する湿邪を除くために—



症例 37歳、男性

【現病歴】

2020年4月7日 38度の発熱。コロナウイルス感染が心配で、家族にうつさないように以後車上生活 保健所に電話するが近医受診の指示。

4月8日（水）当院受診。発熱38℃。

【現症】

脈は滑 舌は淡紅胖大 苔少 悪寒なし

前日は軽い悪寒と骨節痛を自覚

白血球4600（Ly16.5 GR74）CRP0.11 PLT20

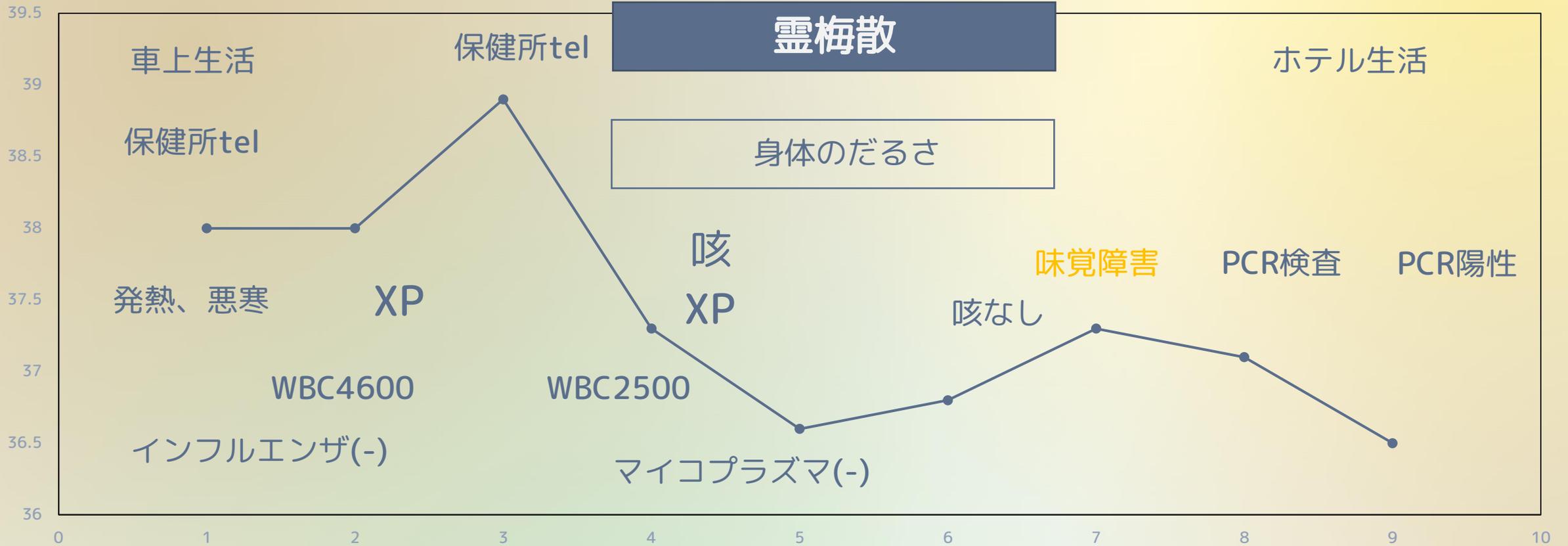
胸部レントゲン異常なし。インフルエンザ(-)

血圧112/82 P79 SPO2 右96、左97

小柴胡加桔梗石膏7.5g、麻黄湯7.5gを処方。

カロナール屯用(服用せず)





	神秘湯	五虎湯
小柴胡加桔梗石膏	竹茹温胆湯	小青竜湯
麻黄湯	白虎加人参湯	柴苓湯



考察

- 初期治療の麻黄湯合小柴胡加桔梗石膏投与後、解熱し、身体が楽になるなど感触はよかった。その後の咳嗽に対し処方した竹茹温胆湯、神秘湯、白虎加人参湯に関しては、微熱ながらも病邪がうつうつと伏している感じで、投薬があってもいないようにも覚えた。
- うつうつと伏しているこの時期こそ、治療上の大切な時期だと思われる。竹茹温胆湯には黄芩がなく、この時期には柴胡黄芩の組み合わせが必要だったのではないかと感じている。
- その後、味覚障害がはっきりとでるようになり、麻杏甘石湯7.5g合小青竜湯7.5g合柴苓湯9gを処方、呼吸苦にオルベスコを併用、この処方です翌日にはあきらかに元気になった。
- ホテル入居後も、状態は順調に改善し、二度のPCR検査で陰性となり、21日後退院となった。オルベスコを併用したのでなんともいえないが、変方後、すぐに病態が安定し、そのまま治癒した。

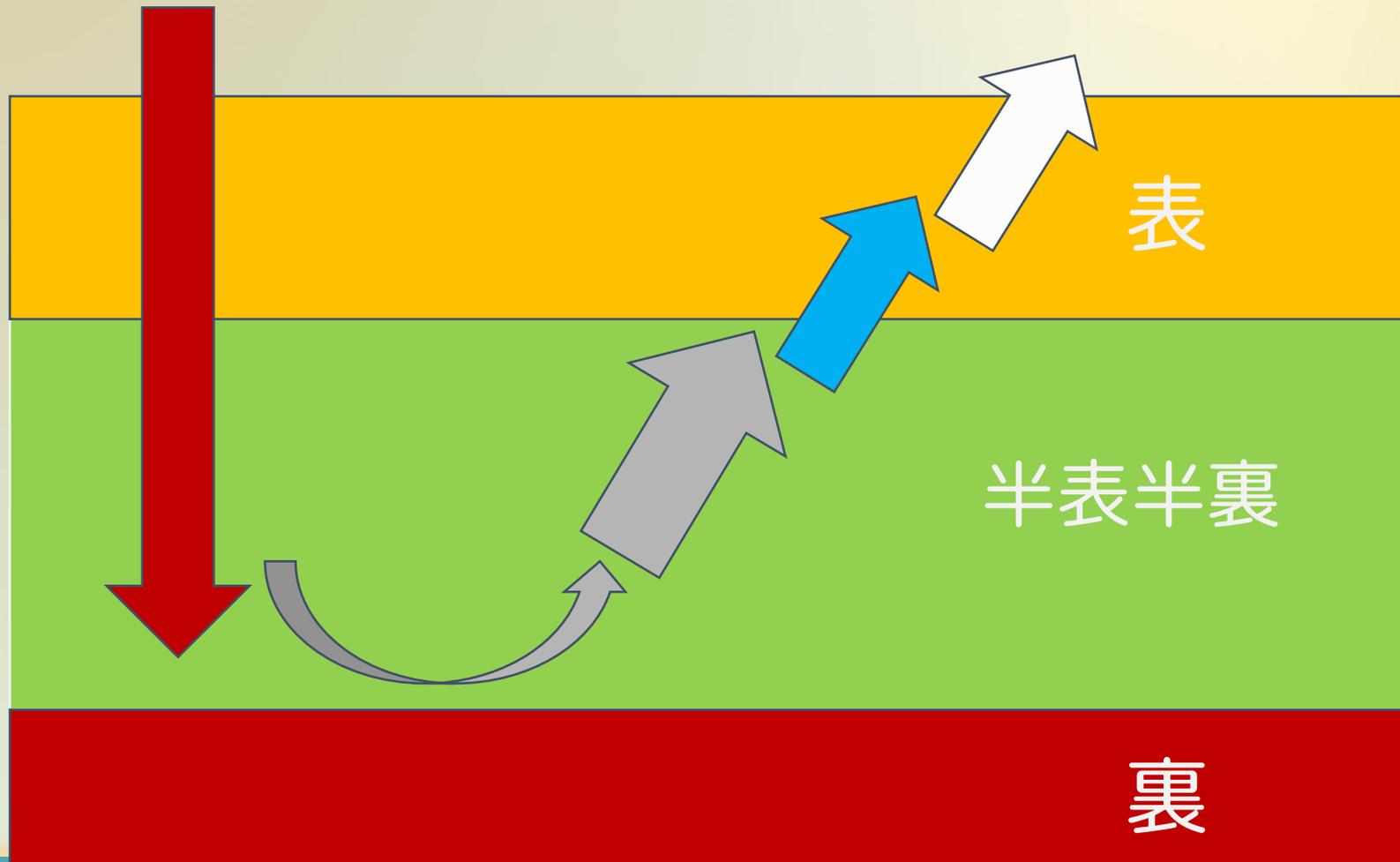


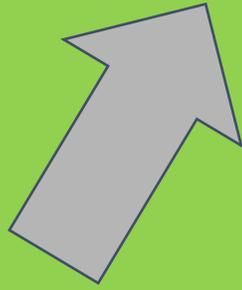
柴胡の力をどのように引き出すか

それが問題だ



柴胡は解表の力はないが、半表半裏に作用し、
裏から表に向かって邪を引き出す



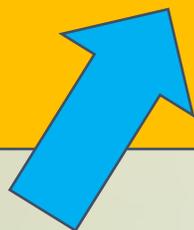


- 新型コロナウイルスは、早い時期から半表半裏に進入する性質がある
- 早期から柴胡剤を使用することによって、半表半裏の熱を和解し、サイトカインの暴走を抑制するとともに、邪が裏に進行するのを防ぎ、邪を表に向かわせる作用を期待する



湿邪を動かす





芳香化湿薬

辛温の芳香化湿薬は、脾の運化機能を促進し、
半表半裏に停滞した湿邪を
温め、利水し、発散する
抗菌、抗ウイルス作用を持つものもある



藿香

佩蘭

蒼朮

厚朴

縮砂

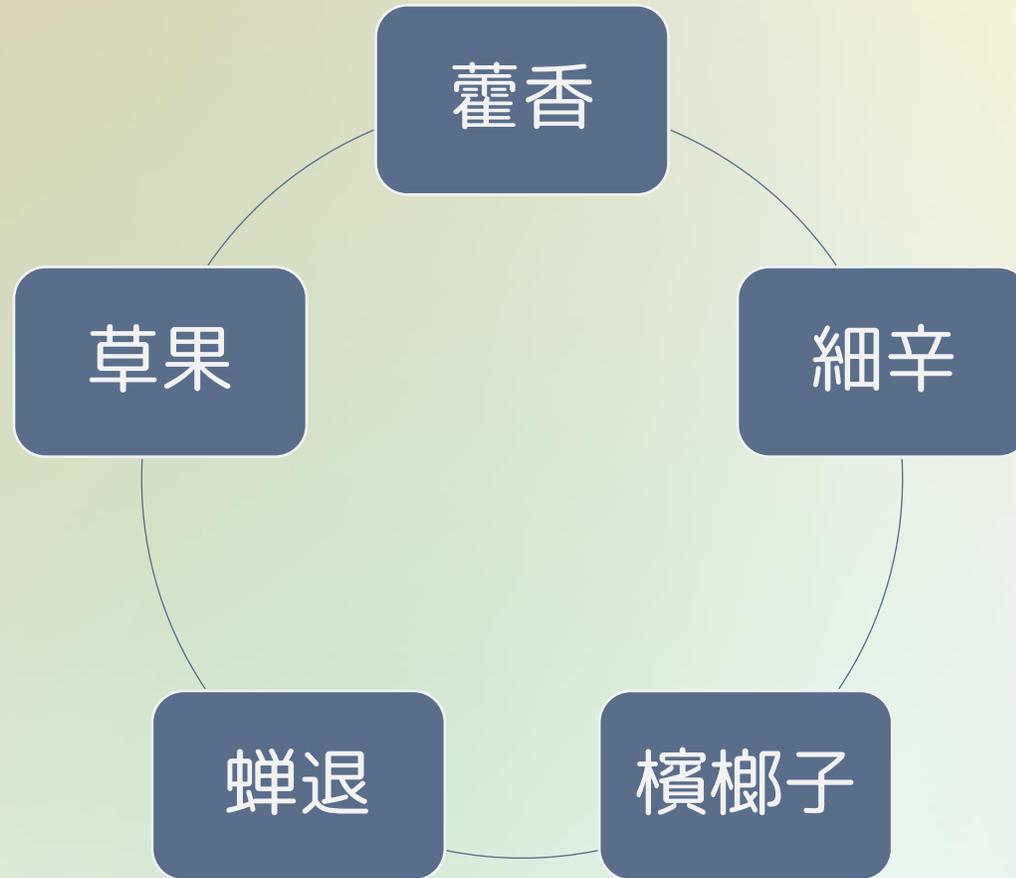
草果

白豆蔻

石菖蒲



重い湿邪を動かす生薬候補



さらに重い湿邪を動かす



芳香化湿薬に 蝉退・白僵蚕 を加える



昇降散 《傷寒温疫条并》

別名（表裏双解散）

● 白僵蚕 ・ 蝉退 ・ 姜黄 ・ 大黄

（細末にして黄酒と蜂蜜で調整して冷服する）

適応：温熱病による悪寒、高熱、口渇、煩躁、便秘

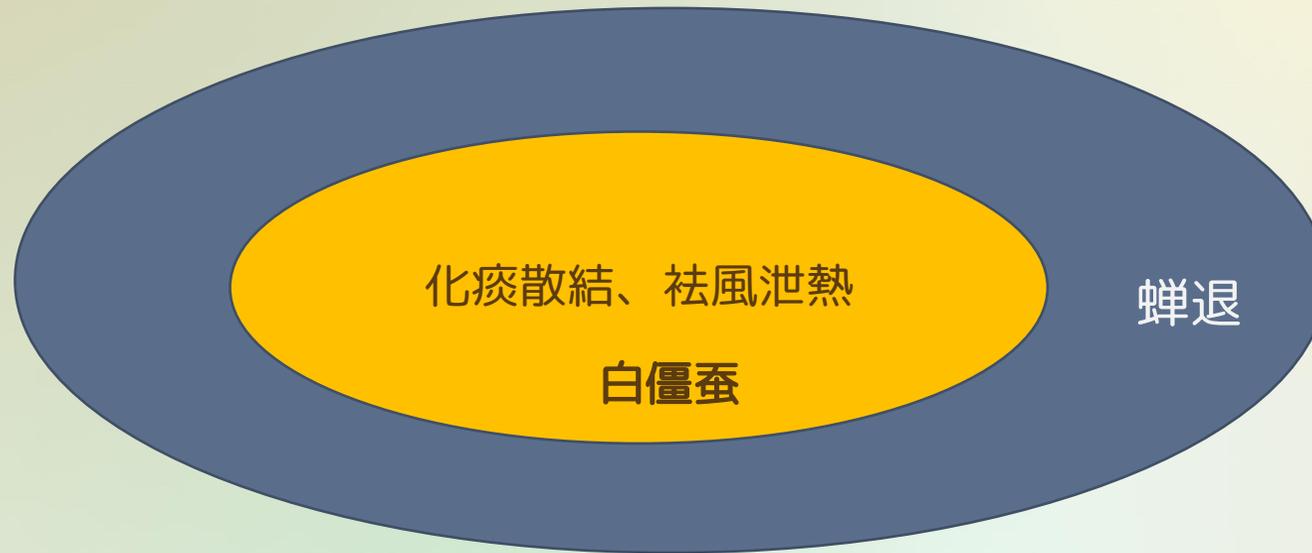


昇降散の昇の2味

- 蝉退 セミの抜け殻 辛涼解表
性味 甘、寒 帰経：肺、肝
疏散風熱、透表止痒、退翳明目、祛風解痙、利咽開音
- 白僵蚕 加10の幼虫がビャクキョウサンビョウウキンの感
染により硬直死した虫体
性味 鹹、辛、平 帰経：肝、肺
熄風解痙、化痰、熄風泄熱、消腫散結
軽浮で上昇作用があり、風湿を除き、清熱解鬱し、あらゆる怫
鬱の邪気を退ける。



湿鬱が手ごわいとき 白僵蚕で粘った湿を溶かし 蝉退で透表する



深くこびりついた湿と熱をともに表に運び清解する



清熱の難しさ



Covid-19において、清熱解毒の多用により脾胃を損傷し
湿邪をとどめてしまった

清熱解毒薬をなるべく使わずに
湿邪を除く処方はないものか



それが 達原飲



達原飲 温疫論(1642) 呉有可

- 檳榔子6、厚朴3、知母3、芍薬3、黄芩3、草薢1.5、甘草各1.5
- 湿熱疫邪が半表半裏の膜原に侵入し、まず悪寒し、ついで発熱するという半表半裏証の発作を治す
- 膜原（胸膜と横隔膜の間）に伏在した湿濁疫邪を開達して除く



● 檳榔子 ヤシ科のビンロウジュの成熟種子

- 性味：苦辛温 帰経：胃、大腸
- 行気消積、瀉下
- 利水消腫
- 截瘧
- 気を下降させて痰を行らせ、水を消し、滯破して積を除き、食を化すので、降気破滯、通降導滯、瀉痢後重、食積痰滯、胸腹脹悶、水腫脚気を治す。

● 草果 ショウガ科のビャクズク属植物の成熟果実

- 性味：辛大温 帰経：脾、胃
- 散寒燥湿、除痰截瘧
- 辛温燥烈で独特の臭気と棘味を持ち、脾胃湿濁を化し、散寒燥湿、除痰截瘧に働く。脾胃の寒湿鬱伏による瘧疾および湿濁内蘊による温疫の増寒燥熱、胸痞嘔悪、舌苔厚膩に用いる。瘧疾には清熱薬と用いると効能が高まる。



知母、黄芩という
清熱の生薬に、
檳榔子、草果という
辛温の生薬をあわせる



- これら辛温の生薬が
湿濁内蘊を動かし
膜原に停滞した
湿と鬱熱を芳香化湿する



達原飲の実績

- 1641年 温疫が北京を中心に流行。呉又可は邪気が口や鼻などから体に侵入することを提唱し、

邪気が膜原に居座るという病機から

達原飲という処方を作り効果をあげた



表より中に入り込んだ
邪を取り除く

半表半裏の和解

→小柴胡湯

膜原の疏利

→達原飲



傷寒論の小柴胡湯と
温疫論の達原飲の
組み合わせこそ
Covid-19を治療する鍵ではないか



そんな処方があるのか？



三消飲

温疫論(1642) 吳有可

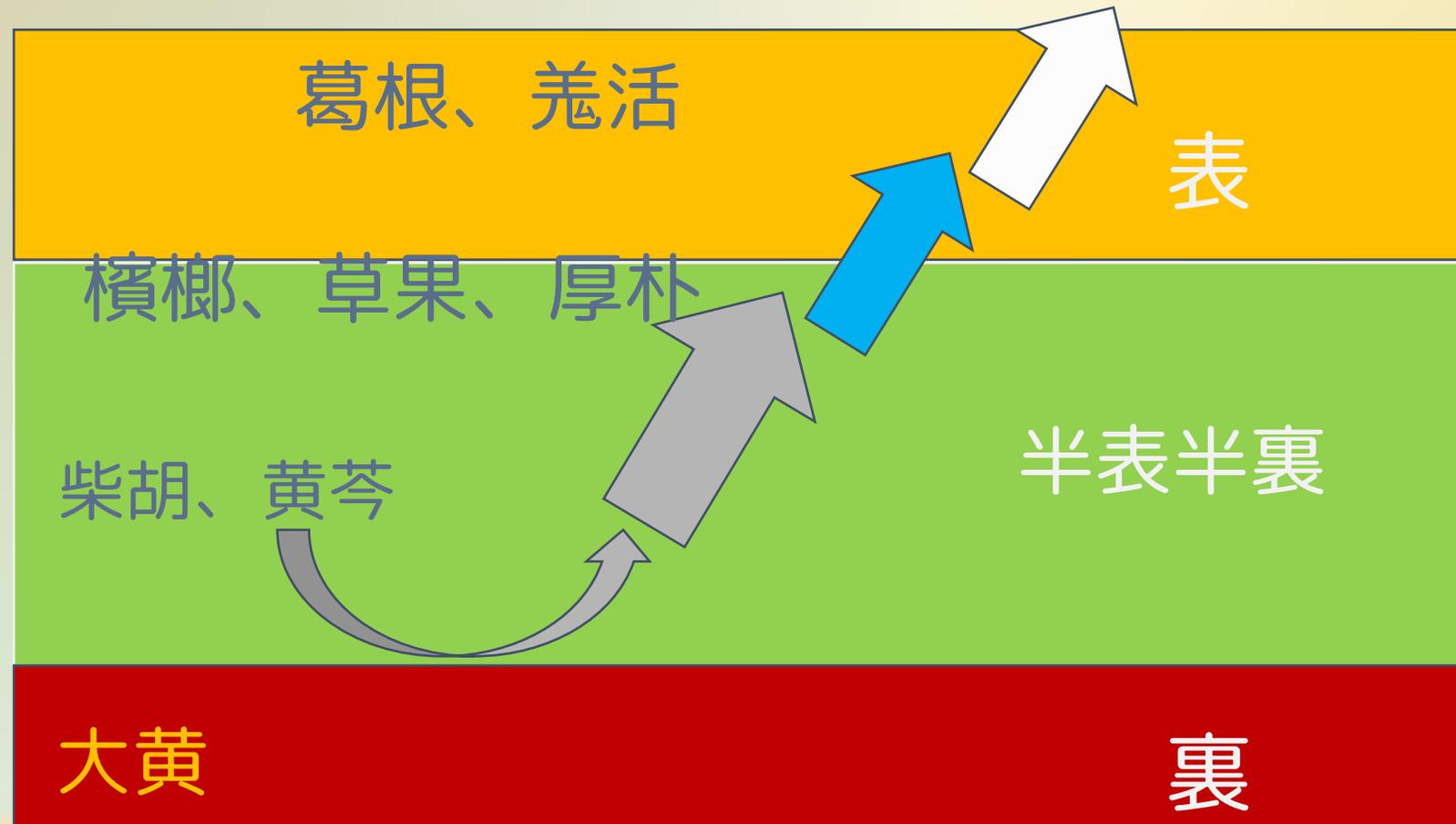
- 葛根、羌活
- 柴胡、黄芩、
- 檳榔、草果、厚朴
- 芍薬、甘草
- 知母、大黄



この部分に注目！



三消飲は表、裏、半表半裏を双解する



只有可の達見

- 温疫の病因は風寒暑湿でなく「異気」で伝染性である
- 温疫の初期は傷寒の発表でなく、膜原の邪を疎利する必要がある
．．．．．達原飲
- さらに邪が深く進攻し、熱鬱が強い病態に対して疏肝清熱し
血分への進入を阻止する必要がある
．．．．．三消飲



温疫論の治療戦略

- 温疫論は流行性でも、傷寒とは異なる温疫の概念を前面に掲げた革新的な医論書で、多岐にわたる内容が論説されている。すなわち風寒暑湿のいずれでもなく、天地間に存在する「異気」（戾気・癘気ともいう雑気的一种）が温疫の病因で、伝染性であること。伝染病でも動物種が違えば感染しないように、各種の異気があって、各々が諸種伝染病の病因であること。温疫の初期は傷寒の発表ではなく、膜原の邪を疎利する必要がある、その処方として「達原飲」を創方



- さらに温疫の治療原則は「先裏後表」とし、「三消飲」その後、各異気ごとに固有の部位に到達して病変を起し、同一異気ならば感染者は同病となること。したがって温疫の初期は傷寒の発表ではなく、膜原の邪を疎利する必要があり、その処方として「達原飲」を創方。さらに温疫の治療原則は「先裏後表」とし、「三消飲」などを創方している。また傷寒と温疫の初めは異なるが後は同様とし、承気湯類に津液を補う薬物の加味方を用いること。進行程度の診断には舌診が有用であること、などが論説されている。

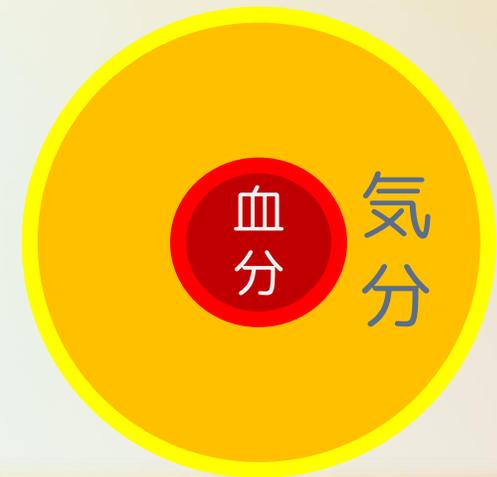


発熱には石膏



石膏は臓腑の熱をさます

- 石膏は肺胃の火熱を清し、おもに気分にはいり、あわせて解肌達表し、邪を外透する効力をもつ



石膏は疫病の高熱から命を救う

- 清の乾隆年間、華東地域で温疫流行。呉又可の達原飲を用いたが、治療効果がなかったため、大量の石膏を含む方剤を作ったところ効果があった
- 1793年に北京で再び温疫が流行し、呉鞠通は温熱病の高熱に対して、辛涼輕劑・辛涼平劑を使ったものの、効果はなく、張仲景の白虎湯を応用するとすばらしい効果を発揮した
- 北京の高官の高熱が下がらず、呼吸困難に陥っている状態で、生石膏を大量に用いたところ、命を救うことができたという当時のエピソードが残っている



- 石膏は長期的に服用すると脾胃を損傷するが、短期的に用いるときは、清熱解毒剤のように脾胃の気を傷ることなく、津液を守り、邪を内向させずに大熱を清解する
- 辛温の麻黄と併用することで肺熱をさり、気道の炎症をとり清熱利水し解表を助ける



北摂コロナ一方（加減あり）

- 柴胡 10、黄芩 6
- 藿香 12、檳榔子 6、厚朴 4、蒼朮 6、
- 甘草 3、草果 5、半夏 6
- 蝉退 10、白僵蚕 6
- 麻黄 6、石膏 15、杏仁 3
- 細辛 3、五味子 2



おわりに

重症化してからでは遅い
国が指定していた軽症自宅待機の
時期こそ、漢方の出番である

